

ハンス・コルネリウスとその思想

—— かれの思索の形成を中心として ——

的 場 哲 朗

はじめに —— ハンス・コルネリウスの哲学について

ハンス・コルネリウス (Hans [本名, Johannes Wilhelm] Cornelius, 1863-1947) については今日、“フランクフルト学派の育ての親”としてしかその名前は知られていないのではないだろうか。

『アドルノ』を書いたマーティン・ジェイは、「コルネリウスは、彼自身も芸術に強い関心をもった非正統的な新カント主義者であった」①と述べている。また、シャイブレは、「かれの哲学的な自己理解によれば、かれはカントを継承する啓蒙家であり、超越論的哲学を経験主義的に新しく基礎づけることによってカントの厳密な先験主義を回避しようとしたのであった」②と述べている。このふたりの説をとれば、コルネリウスは「新カント主義者」ということになる。

あるいは、レーニンの有名な『唯物論と経験批判論』の一節を思い起こすかも知れない。それによると、コルネリウスは、マッハやアヴェナリウスといった「師匠の是認する門弟」③であり、マッハの『感覚の分析』の言うところを直接引けば、「アヴェナリウスの研究の核心を開示し、これをさらに発展させる」ということになる④。このふたりの説をとれば、コルネリウスはマッハやアヴェナリウスを継承する「経験批判論」のひとりだということになる。

いや、『論理学研究』における有名な、フッサールのコルネリウス批判を思い出すかもしれない。それによれば、コルネリウスは「心理学主義」とし

て批判されているのである。

「これまでわたしたちが論駁に努めてきた心理学主義とよく似たものに、ここ数年ひじょうに普及しつつある別の形式の、論理学および認識論の経験論的基礎づけがある。すなわちアヴェナリウスの言う最小力量の原理や、マッハの言う思惟経済の原理による、それら諸学問の生物学的基礎づけがそれである。この新しい傾向が結局はふたたび一種の心理学主義に合流することは、コルネリウスの『心理学』に一番はっきりと現われている。同書では問題の原理が明確に『悟性の基本法則』として、また同時に『一般的な心理学的基本法則』として主張されている。この基本法則に基づいて建設される心理学（しかもとくに認識過程の心理学）は同時に哲学一般の基礎を提供するとされている。」⑤

フッサールによれば、コルネリウスは「心理学主義」のひとつだということになる。ただ、こうしたフッサールの批判にたいして、コルネリウス自身はさまざまな機会を利用して反批判を試みている。

たとえば、『認識論の基礎』にはつぎのようにある。「今日でもまださまざまに行われている心理学主義的な学問の努力の仕方にたいしてフッサールが取っている立場は、すでにわたしの『経験科学としての心理学』の中でわたしが基礎付けたと信じる立場と同一のものである」⑥。コルネリウスとしてはむしろ、自分の哲学的立場を「純粹現象学」ないし「哲学的基礎学」と名付けたいとさえ述べている⑦。

ともあれ、かれの哲学はいったいどのようなものであったのだろうか。第一部ではまず、1921年にライモント・シュミットが編んだ『現代ドイツ哲学の自己紹介』の「ハンス・コルネリウス」[以下、本書からの引用は頁数のみを挙げる]を手掛かりにして、かれの生涯と思想にアプローチしてみることにはしたい⑧。

第一部 ハンス・コルネリウスの生涯と思想

『現代ドイツ哲学の自己紹介』に寄稿した論文の巻頭で、ハンス・コルネ

リウスはつぎのように述べている。

「わたしの教説の生成については…わたしの生涯の発展と結びつけてしか説明されえない」(81)。

わたしたちもこの指示に従うことにしよう。

ハンス・コルネリウスは、ミュンヘン大学歴史学教授カール・アドルフ・コルネリウス (Carl Adolf von Cornelius, 1819-1903) とその妻エリーザベト (Elisabeth, 旧姓ズィムロック Simrock) の末っ子として1863年9月27日ミュンヘンに生まれている。両親はともにニーダーラインの出身という。

まず気がつくのは、かれの類い希な芸術環境であろう。

かれの祖父カール・コルネリウス (Carl Cornelius, 1793-1843) は演劇俳優で、哲学者ハンスの父カール・アドルフはその長男であった。父の従兄弟、末っ子のペーター・コルネリウス (Peter Cornelius, 1824-1874) は作曲家であり、画家ペーター・フォン・コルネリウス (Peter von Cornelius, 1783-1867) は祖父の従兄弟に当たる。また、哲学者の母エリーザベトは、ボンの音符出版者ペーター・ヨセフ・ズィムロック (Peter Joseph Simrock) の娘である。— 後年、テオドール・W・アドルノなどがコルネリウスに惹き付けられるが、それはこうした芸術環境によって培われたかれの芸術的素養にあった。

1、就学時代

a、家庭教育と音楽教育

家庭教育は、厳格なカトリック精神に包まれた窮屈なものだったらしい。かれは次のように述懐している。

「子供のころ、わたしの家庭には厳格なカトリック精神が漂っていたが、こうした呪縛からわたしはのちに学問的洞察 [を深めること] によって解放された。とはいえ、こうした桎梏から完全に脱してわかったことは、わたしの内的体験のおおくのものがかような影響に負っており、わたしにとってそのどれもがなくてはならないものだということである。」(81)

初等教育は数学者の父の家庭教育で終え、1876年秋、ミュンヘンのマキシ

ミリアン・ギムナジウムの第6学年に転入した。しかし、数学にはなんとか興味を示したものの、ギムナジウム生活には馴染めなかった。そのころのことをコルネリウスはつぎのように述懐している。

「〔編入の〕4年後にギムナジウムを卒業するが、ここで得たものは、そこで費やした時間がわたしにとって徒労にすぎなかったという確信であった。なんとか興味をひいたのは数学教師だけだった。幸運にもわたしは家庭での時間が十分にあり、そのおかげで授業の味気ない時間の代用物を作り出すことができた」(81)

こうして、かれの関心は、ギムナジウムに編入の二年前に目覚めた化学実験に向かい、シュテックハルト (Julius Stöckhardt, 1809-86) の入門書を手掛かりに独力で科学の重要公式のいくつかを発見したという。

十歳のときに、ピアノをはじめている。しかし、かれの述懐するところでは、かれには「生まれつき音感がなかった」らしい。ピアノの弾き間違いも、高音低音の区別もかれにはわからなかった。そのため、ピアノは途中で中断せざるをえなかった。ところが、「十四歳になって、わたしのたったひとりの兄——造形芸術に天才的な才能を示した——が亡くなったあとの長患いの孤独の中で、わたしは純粋に知性の力で音楽とその理論を勉強しはじめた。音は、わたしが愛情を注げば、応えてくれる。音感も——リトミックにたいする強い感情に支えられて——次第に磨かれはじめ、共演しても、初見で完全に間違えることなく弾けるほどのピアノ奏者となった」(82)。ギムナジウム時代、管楽器や弦楽器にも取り組んだらしい。

ここに浮かぶのは、早熟の天才というよりは紆余曲折を経る努力家の姿であろう。コルネリウスはわざわざこんな文章も書き添えている。

「わたしがこうした事実をこんなに詳しく述べたのは、“音感”のないような子供に音楽教育を施しても無駄だという教育者の意見があやまっており、音感は言語と同様に、磨かれて行くのだということを示したかったからだ。」(82)

b, 紆余曲折の大学生生活

1880年、コルネリウスはミュンヘン大学に進学する。かれは、「化学と数学と音楽研究」に刺激されて、「包括的で体系的な認識への衝動」をもって数学と物理学の研究に没頭する。かれは、「これによって確実な、普遍妥当的な認識の基盤を獲得するという明確な意図と希望」をもってしたが、三学期間研究するが、ここでもかれの関心は次第に、音楽研究や外国文学（イギリス、イタリア、スペイン、アラビア文学）の翻訳や詩の創作という「自宅の趣味」に向かっていった。これは、「二股をかけることの嫌い」な父の反感をかっただけではない。コルネリウスはこうして、休日の大部分をイタリアで過ごすことになり、この地はまたかれの「第二の故郷」(82) となったという。

1882年の復活祭にベルリン大学に移り、三学期間、ヴァイアシュトラース (Karl Weierstrass, 1815-97) の数学講義とキルヒホフ (Gustav Robert Kirchhoff, 1824-87) の物理学講義に夢中になる。なかでもキルヒホフの講義はかれに決定的な影響をあたえた。

「キルヒホフの講義は、わたしの学問的な発展にとって決定的なものとなった——それは、かれの豊かな講義内容ではなくて、何度も繰り返されたつぎのような哲学的な意図である。すなわち、不明瞭な前提はこれをすべて回避し、物理学をこの意味で、できるだけ完全な単純な事実記述として形づくるというものである」(83)。

ヘルムホルツ (Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821-94) の物理学講義には不満だったという。この頃、かれはカントの『純粋理性批判』を読んでいる。

「講義のほか、わたしは当時、カントの『純粋理性批判』にはじめて取り組みはじめた。しかしこの本には、踏み込むことのできない原野のあることがわかった。わたしには、カントが説明なしに使っている諸概念の意味がどうしても理解できなかったのである。対象、現象、直観、受容性、自発性そのほかの言葉がいったい何を言っているのか、わたしにはどうしても解き得ない謎として残った。こうした不明瞭な諸前提に基づいてなんとか明証性を

獲得したいという努力も、ながい努力の末、絶望してやめてしまった。当時もそうだったが、後になってからも哲学の講義にわたしは出たことはない」(83)。

コルネリウスは『哲学入門』(1903)において、「哲学の努力はどこにおいても明証性を求めること (Streben nach Klarheit) と同一である」⑨と述べている。「究極明証性と確実性を求める努力」⑩としての哲学は、物理学者キルヒホフの講義から着想を得、カントの『純粹理性批判』によってこれを吟味されたことになる。じっさい、『哲学入門』の序論にはつぎのようにはっきりと書かれている。

「物理学的な根本諸概念に基づいて形而上学的不明瞭性を取り除こうと目指す努力——この十年間にキルヒホフ、マッハ、ヘルツの仕事の中で明るみにでてきた努力のことであるが——を知るひとは、本書の意図と、ここに挙げた [三人の] 研究者の目標とのあいだの共通点に気がつくはずだ。わたしはどうしても感謝の言葉を述べざるをえない。なんとなれば、グスタフ・キルヒホフの諸講義によって、本書の試みた諸直感を発展させる最初の基礎があたえられたことを知っているからである」⑪。

コルネリウスの哲学の基礎はベルリン滞在中の三学期間に胚胎したことになる。

1883年秋、ふたたびかれはミュンヘン大学に帰り、二学期間、アドルフ・フォン・バイアー (Adolf von Baeyer, 1835-1917) の化学講義を聴き、化学事象への熱力学の応用を試みる。しかし、W.ギブズ (Josiah Willard Gibbs, 1839-1903) に同一の研究があることを知り、コルネリウスは絶望する。こうして純粹数学の研究に没頭する。1984年秋、ライプツィヒ大学に移り、クライン (Felix Klein, 1849-1925) のゼミナールで研究をまとめようとする。しかし二か月後、自宅にもどり、「数学の研究は自分の問題ではない」(83) と確信する。

そのときのことをつぎのように述懐する。

「しかし二か月後、わたしは家に戻って徹底的に勉強に打ち込み、数学の

研究は自分の問題ではないことを確信した。自分では、音楽か哲学かしか生涯の仕事は考えられないと父に説いた。しかし父は、一度はじめた研究はその学部の領域内で締めくくると譲らなかった。そこでわたしはその締めくくりを化学者としてやろうと決め、さっそく（1885年の新年）フォン・バイアーの実験室にこもり、指示された分析研究と標本研究を一年で終え、さらに半年後の1886年6月8日、クエン酸によるオルツインの化合に関する研究で学位を取得した。その後すぐ、バイアーの実験室の第一教育助手となり、二年間この地位についた。このころ、結婚をした。」(83f.)

紆余曲折は経たが、コルネリウスの就学時代は一応これで終わり、本格的にかかれは哲学研究に向かう。

c, 本格的な哲学研究に向かって

コルネリウスはショーペンハウアーを読む。

「その間もわたしは哲学的努力を忘れたことはなかった。ショーペンハウアーを読んだ。かれの思想に満足したわけではなかったが、観念論の出発点こそ形而上学に染まらない自然認識の唯一確実な基盤であることが見えてきた。キルヒホフから刺激された、独断的概念はすべて回避するという要求はこの出発点以外に遂行することはできないとわたしには思われた。こうした、一切の不当な概念から自由な哲学を基礎づけるというわたしの努力はこのときにはじまったのである」(84)。

哲学研究とならんで、芸術への関心が目覚める。

「わたしは休暇中、イタリアにずっと滞在していたが、ますます心からルネッサンス芸術に惹かれてしまった。とくにわたしが気に入ったのは彫像(Plastik)で、自分でも創りたいという、止みがたい衝動にかられた。わたしは粘土を手に入れ、眠った子を腕に抱いている等身大のマドンナを作りあげた。この新しい活動はまもなく、哲学と同じくらい、わたしにはなくてはならないものになってしまった。ところが、実験室にいたがために、こうした副業に力と時間がさけなくなったので、わたしは——激しい言い争いをして——実験活動をやめる決意をした。ただ、獲得した知識は、当時すでは

じめていた理論研究において活用するという条件をつけられたが。」(84)。

かれは早速、「精密科学の公理と仮説」(die Axiome und Hypothesen der exakten Wissenschaften)の研究でミュンヘン大学哲学部の自然科学科の教授資格を取ろうと試みるが、これは結局、賛否両論で否決されてしまう。哲学の知識が不十分だというのがその理由だったらしい。その理由を教えてください。シュトゥンプフ(Carl Stumpf,1848-1936)の判断で、かれは近現代の哲学、とりわけイギリスやドイツの心理学文献をむさぼるように勉強した。この研究の最初の成果が「融合と分析」(Verschmelzung und Analyse)である。この論文は「科学哲学季刊誌」(Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie,Bd.17,1892/93)に掲載され、その雑誌の編集者であった、経験批判論者のアヴェナリウス(Richard Avenarius,1843-1896)と知り合うこととなる。

「わたしはかれにちょっと会っただけで、かれから、独断的束縛から究極的に解放される(letzten Befreiung von dogmatische Befangenheit)ためにはわたしの哲学にいったい何が足りないのかを学び取った。それは、投入作用(Introjektion)など排除するということだった。つまり、わたしたちの感官をわたしたちの神経体系内に局限するという[かれの]主張は根拠も意味もないという洞察である。そのほかにかれの理論から教えられるものはなにもなかった。なかでも、かれの“経済原理”の生物学的基礎づけや解釈には追従する気持ちはまったくない。こうした観点からわたしのことが云々されるが、これはすべて根拠のない話である。わたしの思想はまったく別のものである。」(85)

1894年2月、コルネリウスは、「存在判断論の試み」(Versuch einer Theorie der Existentialurteile)によりミュンヘン大学において哲学の教授資格取得する。「教授資格論文…を仕上げながら、後にはっきりと見えてくるような、わたしの世界観の基礎が確固としたものとして結晶してきた。この世界観の基礎については、1896年の『科学哲学季刊誌』に掲載された短い論文『演習の規則』(das Gesetz der Übung)ではじめて言及した。」(85)

2、ミュンヘン大学時代

a、最初の作品『経験科学としての心理学』（1897）

1896年、最初の授業は、心理学と論理学についての講義と、カントの『純粹理性批判』演習であったが、これと平行して、処女作『経験科学としての心理学』（*Psychologie als Erfahrungswissenschaft*,1897）を執筆する。かれはつぎのように述べている。

「最初の学期、わたしは主に心理学と論理学に関する大きな講義、それにカント『純粹理性批判』についての演習をもったが、わたしは1897年に公刊される著作『経験科学としての心理学』を書いた。この本でわたしが試みたのは、あらゆる独断的な前提から自由な、意識過程の直接所与の事実についての学問、かくして形而上学から自由な心理学を基礎づけることであった。この心理学はほかのすべての哲学の基盤として、またすべての経験科学の基盤として役立つはずである。わたしとしては、この研究で批判の余地のない、厳密に科学的な哲学の基礎を獲得することを願った。」(85)

コルネリウスはこの処女作についてふたつのコメントを記している。面白いことに、ともに現象学に関係している。このコメントはかれと現象学との関係を知るうえで重要な証言となるはずである。それゆえ、すこし詳しくかれのコメントをおってみよう。

コルネリウスはまず第一に、本書の多くの箇所です術語に不首尾があったことを認めている。「その都度直接的に与えられる体験とこの体験の意味とが——この違いはあらかじめ詳しく論じていたにもかかわらず——はっきりと区別されていないため、多くの箇所ですそれは術語の不首尾に終わってしまった」(85)。このため、本書の意図がくもらされ、誤解を招いてしまったと言っているのである。かれみずから本書を、「認識論の“心理学的”基礎づけの試み」であると説明したことも災いしたらしい。これも元はといえば、術語の不首尾という欠点からきた、とコルネリウスは弁明している。かれの説明では、ここに言う心理学は、「徹頭徹尾ア・プ・リ・オ・リ・ーな学問」（傍点、原著者）のことであって、「それは、現象的に与えられたものについてのまったくの普遍

妥当な判断から、あるいは、当時のわたしの表現を使えば、知覚概念についてのア・プリオリな総合判断から構成されるのである。こうした知覚判断の普遍妥当性については本書の第6章が理論考察をしている」(6)。

このように本書の不首尾についてコメントしながら、本書はむしろ「純粹現象学」(reine Phänomenologie)ないし「哲学的基礎学」(philosophische Grundwissenschaft)と呼ぶべきであった、と述べている。

「今日であれば、本書のタイトルが専門家たちに本書の意図を示すどころかかえって隠すことになったことを認めたい。わたしとしては、——それ相応に術語は書き換えたうえでではあるが——むしろ“純粹現象学”か、“哲学的基礎学”とか呼びたいところである」(86)。

第二のコメントはアヴェナリウスとマッハ(Ernst Mach,1838-1916)の思惟経済に関係する。すこし長いが、重要なので引きたい。

「わたしは、自然科学から出発しているため、他人の[学問上の]優先権を傷つけるようなことはできるだけ避けたいと思ってきたし、そのため、わたしの知る範囲で、わたしの思索の歩みと他人の理論の類似性はなるべくはっきりとさせるようにしてきた。この理由から、わたしは上記の[ふたりの]権威者の名前をわたしの先駆者として挙げたのだが、わたしの“経済原理”はこのふたりのものとは本質的に異なっている。わたしとしては、この原理の内容として、体験中で類似するものを共通のシンボルによって総括的に言い当てるといふ、どこにでもある努力のことを考えていた。つまり、この原理の価値は理念の領域にしか認めていなかったのだ。わたしも、当時の自分の論述のまずさについては認めないというわけではないが、しかしこうした論述を読みながら、どうしてあんなに完全にわたしの論述を誤解することになってしまうのか、わたしには理解できない。わたしとしてはもちろん、フッサールのわたしにたいする論争のことを念頭においている。わたしも『論理学研究』第一巻のフッサールの論述に事柄として完全に賛成するが、しかし、かれが論争の対象として名指したわたしの当時の論述のどこに[かれの論述と]違うものがあるのかわたしにはわからない。」(86)

コルネリウスは、第一に術語の不徹底性を、さらに第二に不用意な、アヴェナリウスやマッハの「思惟経済」との関係を挙げる。このコメントを読むと、『経験科学としての心理学』はすでに当時——術語の不徹底性や先人との不用意な関係があるにしても——フッサールの『論理学研究』と同一の水準に達していた、ということになる。『認識論の基礎』の言葉を引けば、「心理学主義的な学問の努力の仕方にたいしてフッサールが取っている立場は、すでにわたしの『経験科学としての心理学』の中でわたしが基礎付けたと信じる立場と同一のものである」ということになる¹²⁾。

1898年、哲学史の講義に精を出す。早世した友人、生物学者で病理学者のオイゲン・アルブレヒト (Eugen Albrecht, 1872-1908) との会話に刺激されて哲学的思索をさらに深める。

b. 『哲学入門』(1901) の出版

1903年、『哲学入門』(*Einleitung in die Philosophie*, 1911) 公刊。書名は、「書店の都合」でついたものらしい。

本書は哲学史研究からなるが、この事情をコルネリウスはつぎのように語っている。

「わたしはとくに〔過去の哲学者の〕認識論的長所や欠点に注意をはらったが、その際いつもあらゆる不明瞭性と困難の原因として同じ独断的前提が見うけられたのである。この前提はわたしがわたしの哲学理論のなかでその純粹に事象的な内実に向けて還元し、その独断的な衣装を引きはがそうと試みた、あの独断的前提に相違ないのである。そこから、わたしのこの理論は同時に、哲学史の哲学となってしまった。哲学的誤謬の起源を洞察することで、こういった誤謬を克服する道が与えられ、誤謬から生起する哲学的仮象問題の解体が与えられることになった」(86f.)。

「戦時中に第3版が必要となったが、これは出版できず、1919年に発行された第2版原版の復刻で代用されざるをえなかった。実践の問題、とりわけ社会的価値と国家論に関係する章のことを考えると、その間に、この領域で新しい成果を獲得していただけない、わたしとしては残念でならない。」(87)

c. 芸術と学問の結びつき

この頃、学問研究と芸術学的研究がひとつに結び付いていたらしい。コルネリウスはつぎのように述べている。

「学問の仕事にはこの時代はすべて、芸術の仕事がついてまわった。芸術の仕事について言えば、わたしは彫刻家からはじまって画家へと駆り立てられていた。」(87)。

1891年、アドルフ・フォン・ヒルデブランド (Adolf von Hildebrand, 1847-1921) がミュンヘンで個展を開くが、「かれの仕事によってわたしは計り知れないほどの喜びで満たされた。はじめてここに、ドナテルロの精神が新たな生を吹き込まれたように思われた。ちょっと後にハンス・フォン・マレー (Hans von Marée) の遺作の展示がわたしに与えた印象も同じくらい強烈だった」(87)。

コルネリウスは個展の後援者で芸術学者のコンラット・フィードラー (Conrad Fiedler, 1841-95) を訪ねたらしい。芸術論の分野に関するフィードラーの仕事と、1893年に公刊されたヒルデブランドの著書『造形芸術の形の問題』(*Das Problem der Form in der bildenden Kunst*) — といって、「フィードラーの助言をもとに、[マレースの追悼文] の原稿に何度かの修正を加え」^⑬たものであるが— はコルネリウスに強い刺激を与える。かれは、フィレンツェからミュンヘンに転居した(1897-98年)ばかりのヒルデブランドを訪ね、かれの著作について話し合ううちに、小さなサークルで数夜かれの作品について話し合うことにも発展したらしい。この談話に刺激され、コルネリウスは『初歩のスケッチ教育の原則と課題』(*Grundsätze und Lehraufgaben für den elementaren Zeichenunterricht*, 1901) という小冊紙を出版する。これは、ヒルデブランドとコルネリウスの友人で市教育委員ゲオルク・ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschenstreiner, 1854-1932) と一緒に、ミュンヘンの学校のいくつかを視察したことから生まれたものらしいが、後年かれはその内容に不満だと述べている(88)。1901年、かれは建築と美術工芸品の理論を徹底的に研究し、翌1902年にかけて数多くの発見を

する。その成果は「まず造形芸術論講義となり、のちに『造形芸術の初歩の規則——実践的美学の基礎』（*Elementargesetzte der bildenden Kunst. Grundlagen einer praktischen Ästhetik*, Leipzig 1908, 第2版1911、第3版1920）という著書にまとめる」（88）。この著書を出版する前、「2年間、ミュンヘン美術工芸学校で教えて」いる。「ケルシェンシュタイナーの薦めで、コルネリウスはミュンヘンの教師の前で『形の美学』に関する20回の講義をした」⑭という。この美術工芸学校では学生とならんで建築家ベルントル（Richard Berndt, 1875-1955）、ヴァダー（Wader）、ヴァーラー（Wahler）といった教師もコルネリウスの美術講義を聴講したと言う。

こうした芸術学の分野への関心は、グスタフ・ブリッシュ（Gustaf Britsch, 1879-1923）のおかげらしい。ブリッシュはコルネリウスの芸術論講義を聴講するとともに、かれ自身の芸術学的原理論を仕上げたいらしい。「コルネリウスとブリッシュの影響関係はたしかに相互的なものである」と、ライナー・ヘスペは論文「芸術教育学の理論形成に対するハンス・コルネリウスの功績」の中で述べているが、コルネリウスにとってかれの影響はきわめて大きかった⑮。

d. 不遇な大学生活

1903年初頭、員外教授に昇格。1908年初頭、ベニスでティントレットの作品の模写を作成しているとき、ハレ大学の哲学正教授として招聘される。

芸術の都「ミュンヘンと、芸術という点では砂漠にすぎないような一都市とを交換してよいものか、わたしはすぐには決断しかねた。わたしが躊躇しているあいだ、ミュンヘンの学部と文部省が昇進の希望を申し出てきた。そこでわたしは招聘を断ることに決めた。ところが希望は適えられなかった。」（88）

1910年より、コルネリウスは正教授としてフランクフルト大学に移る。この転出については、教授テオドル・リップス（Theodor Lipps, 1851-1914）との軋轢が大きく作用したらしい。

「当時はすでに、いやそのあともずっと、わたしにとってミュンヘンの状

況は日々不愉快なものになっていった。その原因は、わたしの上司テオドル・リップスの病的なまでの妬みであった。わたしのうちにかれは正当にも自分の学問上の論敵を認めたが、しかし不当にも個人的な論敵まで認めたのである。それゆえわたしは、2年後に訪れた、フランクフルト社会科学アカデミーの哲学正教授のポストを引き受ける機会は逃さなかった。なにしろ、アカデミーが大学に変わることはもうぜったい確実だと思えたからだ。」(88)

この時に、ハレ大学の招聘を躊躇した理由から、コルネリウスはフランクフルト大学当局に対して芸術に関する要求を出している。

「招聘を考えて、わたしは次のような条件を出した。それは、フランクフルト市が芸術を取り扱う際、ぜひわたしの意見を聞いてもらいたい、というものだった。」(89)

しかしかれの条件は満たされなかったらしい。かれの言葉では、「しかしわたしが職につき、市長アディケス (Adickes) にこの点を思い出させたとき、わたしにわかったことは、このひとはこの条件の意味がまったくわかっていないということだった。わたしの無理な要求を聴いて、かれがわたしに行くように指示したものは、わたしがやろうと考えたのとは似てもつかぬものだった。…ほかの点では非常に広い視野をもっている市長もこと芸術文化に関しては、この時代の大部分の一般人とまったくかわらなかった」(89)。

3、フランクフルト大学時代

1910年10月、かれは「— 身に受けた損失の大きさに内面は深く打ちひしがれながら — フランクフルトに引っ越した」(89)。フランクフルト北西19キロに位置する「オーバーウルセルに私は田舎屋を建てた。ここには幾晩も、哲学的学問の好きな熱心な学生達がやってきて認識論的議論を行なった」(89)。

a. 『超越論的体系性』(1916) 公刊

1916年、『超越論的体系性』(*Transzendente Systematik*) がミュンヘン

のエルンスト・ラインハルト (Ernst Reinhardt) から出版される。かれはこの本を書くようになった事情を次のように説明している。

「大学の基礎ができるまでわたしは公的活動にあまり煩わされることもなく、学問的な仕事や芸術的な仕事に多くの時間をもつことができた。…当時わたしはマックス・ヴェルタイマー (Max Wertheimer) から多くの助成を得た。出版社との契約にしたがって、わたしはその時代、認識論、とくに精密科学の要求に対応する認識論研究に取り組んでいた。戦争のおかげで契約は解消され、おかげでわたしの研究の成果をほかの形でまとめる暇ができた。わたしは、『哲学入門』の基礎にある思想の歩みを体系的な形でさらに作り上げようとした。その際どうしてもカントの『純粹理性批判』の前提との根本的な対決は不可避となった。とりわけ、確実な、普遍妥当的経験認識の可能性に反対する旧来の偏見は一掃する必要があった。こんな偏見があるために、哲学への道はいつも不確実になるからである。先の契約が求めた認識論的教本という要求は考慮する必要はなくなった。こうした考慮から解放されたので、形はすぐに見つかり、1916年、新しい著作が『超越論的体系性』というタイトルでミュンヘンのエルンスト・ラインハルト社から出版された。」(89f.)

第一次大戦中に再婚する。

b. 政治への関心

政治的出来事のため、かれの関心は理論問題から実践問題に移った。

「世界大戦の狂気のなかにわたしが認めたのは、社会的存在の基礎条件に対する、普遍的に支配する不明瞭性 (Unklarheit) の問題にほかならなかった。こうした条件が政府の手で明瞭に認識されれば、戦争も終わり、敵対する国々も連合して、結果的に超国家的な連邦国家形態になるはずだ。ちょうど、スイスやアメリカにおいて敵対し合った人々が集まって連邦国家が作り上げられたように。」(90)

こうしてコルネリウスが思い描いた国家形態は、「ナウマンの言うような中央ヨーロッパではなくて、全ヨーロッパないしは少なくとも大陸ヨーロ

バ、つまり国家連合ではなくて、統一的経済圏をもった連邦国家、統一的外交と軍事力をもった連邦国家」(90)であった。こうして、さまざまな曲折はあったが、『民族連邦と恒久平和』(*Volkerbund und Dauerfrieden*)をミュンヘンのゲオルク・ミュラー社(Georg Muller)から出版。

同時に、こうした問題に拘わることで、「人間存在の社会的条件やこの社会的条件の理性的形態についての徹底的な研究」(91)に向かうことになる。この成果は、「実践哲学講義」で披露する。

c. 大戦中の芸術活動

1914年9月から大戦が終わる1919年まで、新しい所有者のエーミル・プレートリウス(Emil Preetorius)の依頼で、ミュンヘンのデブシッツ学校(Debschitz-Schule)の改革を行う^⑩。

「大戦が勃発する直前、W.v.デブシッツ(W.v.Debschitz)がミュンヘンで早くに開校した芸術学校、自由芸術と応用芸術のアトリエ(Ateliers für freie und angewandte Kunst)の所有者が代わった。新しい指導者エーミル・プレートリウスが1914年9月に、授業を新しく、わたしが『初歩規則』で書いた原理にしたがって、組織するように求めてきたのだ。わたしはこの求めに応じ、戦時中の休暇の大部分をこのミュンヘン見習い実習工(Munchener Lehrwerkstätten)の指導に使った。1919年に、再度所有者が代わるまで。」(91)

これとは別に、かれの友人で教え子の建築家ゲオルク・フュック(Georg Fuck)の勧めで、かれと一緒に、フランクフルトに同じような学校を創設した。しかしフュックの死去にともなって、この学校は閉鎖することになる。ミュンヘンの経験と、友人たちの勧めもあって、コルネリウスは「芸術教育の原則をまとめ」、オイゲン・レンチュ(Eugen Rentsch)出版社から『芸術教育学』(*Kunstpädagogik*)を出版する。

注釈

1、マーティン・ジェイ『アドルノ』(木田元・村岡晋一訳)岩波書店、

1987年、26頁

- 2、Hartmut Scheible, *Theodor W. Adorno*, Rowohlt, 1993, S.22.
- 3、V.I.Lenin, *Materialism and Empirio-criticism. Critical Comments on a Reactionary Philosophy*, Progress Publishers, Moscow, 1967, p.205.
- 4、Ernst Mach, *Die Analyse der Empfindungen und das Verhaltnis des Physischen zum Psychischen*, Verlag von Gustav Fischer, Jena, 1922, S.40.
マッハはここで、コルネリウスの他、C.ハウプトマン (C. Hauptmann) とJ.ペッツォルト (J.Petzoldt) のふたりの名前を挙げている。
- 5、Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Prolegomena zur reinen Logik*, Erster Band, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1980, S.192. 引用に当たっては、エドムント・フッサール『論理学研究』(立松弘孝訳、1968年、1975年第6刷、みすず書房) 214頁によった。
- 6、Hans Cornelius, *Grundlagen der Erkenntnistheorie. Transcendentale Systematik*, Verlag von Ernst Reinhardt, München, 2.Auflage, 1926, S.188.
- 7、Hans Cornelius, Hans Cornelius. *Leben und Lehre* (in: *Die deutsche Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen*, hrsg. von Raymond Schmidt, Verlag von Felix Meiner, Leipzig, 1921), S.86.
- 8、op.cit..
- 9、Hans Cornelius, *Einleitung in die Philosophie*, Druck und Verlag Von B.G.Teubner, Leipzig, 1903, S.9.
- 10、op.cit.S.VI
- 11、op.cit..S.VIII
- 12、注の6を参照のこと。
- 13、アードルフ・フォン・ヒルデブラント『造形芸術における形の問題』(加藤哲弘訳) 中央公論美術出版、1993年、170頁。

翻訳者の加藤は、「ヒルデブラントは、かれの代表作ともなった〈ヴィッ

テルバッハの噴水〉…の制作を機に、ミュンヘンに家を建てて（1897-98）、フォル・デイ・マルミ（イタリア）の別荘で過ごす夏以外は、ここに住むようになった。」と述べている。この「1897-98」がヒルデブラントの、フィレンツェからミュンヘンへの転居の時期だとすれば、コルネリウスがかれを訪れたのはこの頃ということになる。とはいえ、コルネリウス自身、イタリアを「第二の故郷」（82）と呼んでおり、その点から言えば、直接フィレンツェの自宅を訪れたことは十分考えられる。コルネリウスはかれの代表作『哲学入門』を「アドルフ・ヒルデブラント」に捧げ、交友を続けたらしいが、ヒルデブラントは、しかし、交友関係がじつに広がったらしい。「フィレンツェのアトリエには、フィードラーをはじめとして、画家のベックリー（Arnold Böcklin,1827-1901）やトーマ（Hans Thoma,1839-1924）などがよく訪れていた。また、随筆家のカール・ヒツレブラント夫妻や、ヨハネス・ブラームスの弟子であったヘルツォーゲンベルク家の人々との交際を通じて、ヒルデブラントは、ブラームス、クララ・シューマン、ハンス・フォン・ビューロー、コージマ・ヴァーグナー、ヨーゼフ・ヨアヒム、あるいはメンデルスゾーン家の人々といった、当時の有名な音楽家たちやその関係者とも知り合い」、またミュンヘンの「家には、イタリア時代からの友人に加えて、…かれの交友関係はさらに華やかなものになっていった。そのなかには、バイエルンのヴィッテルスバッハ家の人々をはじめとした貴族や政治家たち、音楽関係では、若きヴィルヘルム・フルトヴェングラー、学者や技術者関係では、ヘルムホルツ父子、ジーメンス、レントゲン、そして、ボーデやバイエルスドルファー、ヴェルフリンなどが含まれている」（『造形芸術における形の問題』、175頁）という。

なお、ヒルデブラントのミュンヘンの旧宅は現在、「ミュンヘンの市立図書館分館市史資料文書室（Monacensia）」として保存されている。

- 14、Reiner Hespe, Der Beitrag von Hans Cornelius zur kunstpadagogischen Theoriebildung, in: *Zeitschrift für Kunstpädagogik*, Heft

- 4, 1978. S.181, vgl.S.182.
- 15、op.cit. S.188.
- 16、Dagmar Rinker, *Die Lehr- und Versuch-Ateliers für angewandte und freie Kunst (Debschitz-Schule). München 1902-14.* tuduv Verlag, 1993.

デブシット学校は、1902年1月3日に彫刻家ヘルマン・オープリスト (Hermann Obrist, 1863-1927) と画家ヴィルヘルム・フォン・デブシット (Wilhelm von Debschitz, 1871-1948) のふたりがミュンヘン市ホーヘンツォラー通り7a (Hohenzollerstr.7a) に作った私立の工芸品のための美術学校。オプリストは健康上の理由から1904年に辞任し、さらにデブシットは財政上の理由から、ハノーファー市立工芸美術学校の主任として1914年夏にこの学校を去っている。1914年7月1日に、ミュンヘンの「イラストと出版業」の学校の主任エーミル・プレートリウス、卒業生パウル・レンナー (Paul Renner)、芸術史家ゲオルク・ブリッシュ (Georg Britsch) の手に渡る。さらに1920年頃にアイクマイアー (L.Eickmeyer) の手に渡り、1929年7月1日に閉校する。

年表・ハンス・コルネリウスの生涯と思想

的場哲朗・編

1863	<p>9月27日、ハンス・コルネリウス、(Hans Cornelius, 本名、ヨハンネス・ヴィルヘルム・コルネリウス Johannes Wilhelm Cornelius) はミュンヘン大学歴史学教授カール・アドルフ・コルネリウス (Karl Adolf von Cornelius, 1819-1903) とその妻エリーザベト (Elisabeth, 旧姓ズィムロック Simrock) の末っ子としてミュンヘンに生まれる。母エリーザベトはボンの音楽出版者ペーター・ヨセフ・ズィムロック (Peter Joseph Simrock,) の娘。祖父カール (Karl Cornelius, 1793-1843) は演劇俳優、父の従兄弟ペーター・コルネリウス (Peter Cornelius, 1824-1874) は作曲家、祖父の従兄弟ペーター・フォン・コルネリウス (Peter von Cornelius, 1783-1867) は画家。家庭は厳格なカトリック精神に包まれていた。</p>
1873	<p>ピアノを始める。しかし、生来の音痴。</p>
1876	<p>初等教育は数学者の父のもとで終え、この年の秋、ミュンヘンのマキシミアン・ギムナジウムの第6学年に転入する。しかし数学には関心をもつが、ギムナジウムには馴染めず、もっぱら家庭での化学実験に没頭。シュテックハルトの入門書を手引きにして科学の重要公式を独力で発見。</p>
1877	<p>たったひとりの兄を失う。この孤独の中からピアノの演奏に熟達する。</p>
1880	<p>ミュンヘン大学に進学する。「包括的で体系的な認識への衝動」をもって、数学と物理学を研究。3学期間没頭するが、しかし、関心はもっぱら自宅での、音楽や外国文学 (イギリス、イタリア、スペイン、アラビア) の翻訳や創作に向かう。この煮え切らない態度は、父の反感をかう。休暇は大半イタリアで過ごす。この地は第二の故郷となる。</p>
1882	<p>復活祭、ベルリン大学に移る。3学期間、数学者ヴァイアーシュトラース (Karl Weierstrass, 1815-1897) と物理学者キルヒホフ (Gustav Robert Kirchhoff, 1824-87) の講義を聴く。キルヒホフに決定的な影響を受ける。「キルヒホフの講義は、わたしの学問的な発展にとって決定的なものとなった」と述べている。ヘルムホルツ (Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821-1894) の物理学講義には不満だったらしい。カントの『純粋理性批判』を読む。この頃、コルネリウス哲学の基礎が固まる。</p>
1883	<p>秋、ミュンヘン大学に戻る。2学期間、化学者アドルフ・フォン・バイアー (Adolf von Baeyer, 1835-1917) の講義を聴き、化学事象への熱力学の応用を試みる。しかし、ギブス (Josiah Willard Gibbs, 1839-1903) に同一研究があることを知り絶望。純粋数学に没頭。</p>

- 1984 秋、ライプツィヒ大学に移る。クライン (Felix Klein, 1849-1925) のゼミナールで研究をまとめようと試みるが、「数学研究は自分の問題ではない」と悟り、2カ月後にミュンヘンに戻る。「音楽か哲学かしか生涯の仕事は考えられない」と父に説得。
- 1885 父の、「一度ははじめた研究はその学部の領域内で締めくくるように」という薦めにしたがって、化学研究を早期にまとめると決意し、新年早々にフォン・バイアーの研究室に戻る。
- 1886 6月8日、「クエン酸によるオルツインの化合」(die Synthese des Orzins aus Zitronensaure) に関する研究で学位を取得。バイアーの実験室の第一教育助手となる。2年間、この地位にとどまる。
- 1887 医師ハインリッヒ・フォン・デッサウアー (Heinrich von Dessauer, 1830-1879) の娘エミーリエ (Emilie, 1862-1946) と結婚。
この頃、ショウベンハウアーを読む。芸術への関心が目覚める。イタリアのルネッサンス芸術、とくに彫像に関心をもつ。自分でも等身大のマドンナを作る。
「精密科学の公理と仮説」(die Axiome und Hypothesen der exakten Wissenschaften) の研究でミュンヘン大学哲学部の自然科学科の教授資格をとろうとするが、「哲学の知識が不足している」という理由で否決される。哲学者シュトゥンプフ (Carl Stumpf, 1848-1936) の助言で、近現代の哲学や、イギリスやドイツの心理学文献を読む。この成果として、「融合と分析」(Verschmelzung und Analyse) を執筆。
- 1891 彫刻家アドルフ・ヒルデブランド (Adolf von Hildebrand, 1847-1921) がミュンヘンで個展を開く。「かれの仕事によってわたしは計り知れないほどの喜びで満たされた」。この頃、ヒルデブランドの後援者コンラート・フィードラー (Conrad Fiedler, 1841-1895) を訪ねる。フィードラーの芸術論とヒルデブランドの著書『造形芸術の形の問題』(1893) はコルネリウスに強い影響を与える。
- 1892 「科学哲学季刊誌」(*Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie*, Bd.17, S.404ff. und 30ff. 1892/93) に論文「融合と分析」を寄稿。この雑誌の編集者・経験批判論者アヴェナリウス (Richard Avenarius, 1843-1896) と知り合う。「わたしはかれにちょっと会っただけで、かれから、独断的束縛から究極的に解放されるためにはわたしの哲学にいったい何が足りないのかを学び取った」。
- 1894 「存在判断の試み」(Versuch einer Theorie der Existentialurteile) により教授資格を獲得。ミュンヘン大学私講師となる。「教授資格論文…を仕上げながら、後にはっきりと見えてくるような、わたしの世界観の基礎が確固として結晶してきた」。

- 1896 「演習の規則」(das Gesetz der Übung)を「科学哲学季刊誌」に寄稿。心理学と哲学に関する講義と、カント『純粹理性批判』演習。
- 1897 処女作『経験科学としての心理学』(*Psychologie als Erfahrungswissenschaft*, 1897)出版。この頃、ミュンヘンに転居してきたばかりのヒルデブラントを訪ね、小さなサークルでかれの作品について語り合う。
- 1898 哲学史の講義に集中。友人の病理学者オイゲン・アルブレヒト (Eugen Albrecht, 1872-1908)に刺激されて、哲学的思索を深める。この頃、友人の市教育委員ケルシェンシュトライナー (Georg Kerschenstreiner, 1854-1932)とヒルデブラントと一緒にミュンヘンの学校を視察する。
- 1901 『初歩のスケッチ教育の原則と課題』(*Grundsätze und Lehraufgaben für den elementaren Zeichenunterricht*)出版。この頃、建築と美術工芸品の理論を構築する。
- 1903 『哲学入門』(*Einleitung in die Philosophie*)出版。彫刻家ヒルデブラントに捧げる。なお、書名は書店の都合でつけられた。
この年、ミュンヘン大学助教授となる。
- 1906 ミュンヘンの美術工芸学校で造形芸術論を講義する。建築家ベルント、ヴァーダー、ヴァーラーも聴講する。こうした芸術論への関心は、芸術史家ブリツシュ (Gustaf Britsch, 1879-1923)の影響だと言う。「心理学主義的原理の問題」(*Psychologische Prinzipienfragen*)を雑誌「心理学誌」(*Zeitschrift für Psychologie*, Bd. 42 und 43, 1906)に寄稿し、フッサールとの対決を行う。
- 1908 ベニスでティントレットを模写する。ハレ大学正教授の招聘。しかし、芸術都市ミュンヘンへの未練からこの申し出を断る。『造形芸術の初歩の規則 — 実践的美学の基礎』(*Elementargesetze der bildenden Kunst. Grundlagen einer praktischen Ästhetik*)を出版。妻エリーザバトに捧げる。
- 1910 フランクフルト大学正教授の招聘を受理する。この転出には、テオドール・リップス (Theodor Lipps, 1851-1914)との軋轢が作用したと言う。「わたしにとってミュンヘンの状況は日々不愉快なものになっていった。その原因は、わたしの上司テオドール・リップスの病的なまでの妬みであった。…そのためわたしは、2年後に訪れた、フランクフルト社会科学アカデミーの哲学正教授のポストを引き受ける機会は逃さなかった。」フランクフルト市長アディケスに市の芸術行政について要望書を提出する。10月、「内面に深く打ちひしがれた」思いを秘めつつ、フランクフルト郊外のオーバーウルセルに転居する。田舎屋を建てるが、後にここに「哲学的学問の好きな熱心な学生達がやってきて認識論的議論をおこなった」と言う。12月3日、フランクフルト・アム・マイン社会商学アカデミー (Akademie für Sozial- und

	Handelsswissenschaften zu Frankfurt a.M.)において就任講義「物自体の認識」(Die Erkenntnis der Dinge an sich)を行う。
1911	フランクフルト大学就任講義「物自体の認識」を雑誌「ロゴス」(<i>Logos</i> , Bd.1.,1910/11,Heft3, S.361-370)に寄稿。『哲学入門』第2版出版。
1914	9月、新しくミュンヘンのデプシット美術学校の所有者となったプレトリウス (Emil Preetorius,) から、『造形芸術の初歩の規則』(1908)の原理にしたがって、授業を新しく改編するように依頼される。1919年、所有者が代わるまで、第一次大戦中の休暇の大半はこのデプシット美術学校に費やす。また、教え子のフュック (Georg Fück) の勧めで、フランクフルトに類似の学校を創設する。しかし、フュックの死去とともに閉鎖。この成果が『芸術教育学』(1920)となる。
1916	『超越論的体系性』(<i>Transzendente Systematik</i>)をミュンヘンの出版社エルンスト・ラインハルトから出版する。この頃、再婚する。戦争を目の前にして、理論問題より実践問題に関心をもつ。「世界大戦の狂気のなかにわたしが認めたのは、社会的存在の基礎条件に対する、普遍的に支配する不明瞭性の問題にはかならなかった」。『国民連邦と恒久平和』(<i>Völkerverbund und Dauerfrieden</i>)をミュンヘンの出版社ゲオルク・ミュラー社から出版。全ヨーロッパからなる、「統一的な経済圏、統一的な外交と軍事力をもった連邦国家」を構想する。
1919	『哲学入門』第2版出版。10月、
1920	『芸術教育学』(<i>Kunstpädagogik</i>)をオイゲン・レンチュ社から出版する。妻インガリル (Ingalill) に捧げる。
1921	シュミット編『現代ドイツ哲学の自己紹介』第2巻 (<i>Die deutsche Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen</i> , hrg von Raymund Schmidt, Bd.2, Verlag von Felix Meiner, 1921.S.80-99)に「ハンス・コルネリウス—生涯と教説」(Hans Cornelius. Leben und Lehre)を寄稿する。『哲学入門』第3版出版。『造形芸術の初歩の規則』第3版出版。
1923	『生の価値』(<i>Vom Wert des Lebens</i>)。
1926	『カントの純粹理性批判注解』(<i>Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft</i>)を出版。『認識論の基礎—超越論的体系性』(<i>Grundlagen der Erkenntnistheorie</i>)のタイトルで『超越論的体系性』第2版をミュンヘンのエルンスト・ラインハルト出版から出版。友人の芸術史家グスタフ・ブリッシュに捧げる。
1934	『哲学的体系』(<i>Das philosophische System. Eigene Gesamtdarstellung</i>)出版。
1947	8月23日、ミュンヘン郊外のグレフェルフインクで死去。